

# 健康な女性、健全な国家

## —アンテベラム期アメリカにおける 退化の不安と健康改革

稲垣伸一

### I はじめに—「カタストロフィ」を予兆する退化の不安

19世紀アメリカにおいて「カタストロフィ」と言える出来事といえはまず南北戦争が思い浮かぶ。長年続いた南北緊張の結果起きた南北戦争は、*The Oxford English Dictionary* 第2版における“catastrophe”の定義に当てはめると、特に南部人にとって定義2に挙げられているSamuel Johnson, *A Dictionary of the English Language*からの引用“A final event; a conclusion generally unhappy”(最後の出来事、一般的には不幸な終局)が当てはまるだろう。また、その後のアメリカ社会に及ぼした影響や変化を考えた時、定義3 “An event producing a subversion of the order or system of things”(物事の秩序あるいは体系を転覆させるような出来事)ということにもなるだろう。しかしここで取り上げるのは南北戦争ではなくそれ以前の19世紀前半、アメリカ人が抱いていた「退化の不安」、具体的には健康についての不安そして短命化の問題である。南北戦争ほどには明確に「カタストロフィ」性を帯びた出来事とは必ずしも認識されていないものの、アメリカ人は漠とした不安を抱えて、あるいは深刻な問題として、19世紀前半の退化に対する不安を「国家の秩序あるいは体系を転覆させるような出来事」と認識していたのではないかと思われる。本論ではこの「退化の不安」に起因する健康改革運動の特徴を、健康改革運動家として19世紀前半から半ばにかけて活躍した一人の女性と一組の夫婦の主張から考察し、併せてその宗教的背景についても考察したい。

## II 死の恐怖と健康改革

アメリカ人の平均寿命は、20世紀以降長くなる傾向が続き（Caplow 5）、その傾向は現在まで続いていると思われる。しかし18世紀末から19世紀半ばにかけては、具体的なデータはないものの、アメリカ人の平均寿命が一時的に短くなったことを複数の研究者が指摘している。1750年から1790年までの期間は独立戦争を含むにもかかわらず、その前の時代よりアメリカ人の平均寿命は長くなるが、続く1790年から南北戦争前までの時期には55歳から48歳へと短くなり、その原因としてはチフス・黄熱病・結核など伝染病の流行が挙げられ（McGarry 22-23）、特に1830年代は結核が頻繁に流行し、1832年にはコレラも大流行した（Green 8, 33, 48, 80）。これから考察するおよそ1820-50年代の時代は、アメリカ合衆国史上唯一、平均寿命が前の時代より短くなった時期に含まれる。

平均寿命が変化する時、その原因としてまず挙げられるのが、乳幼児あるいは子供の死亡率であり、実際、伝染病の犠牲者として南北戦争以前の平均寿命を下げていたのが子供だった。そのためこの時期、主に女性による多くの詩や散文に、死の床の場面や最愛の子供を亡くした後の親の悲しみが描かれるようになる。Molly McGarryはそれを「とりつかれたような死への関心（obsessive interest in death）」(23) と言い、またAnn Douglasは1850年代の文学状況を「死体愛の訓練（exercises in necrophilia）」(200) とさえ呼んでいる。19世紀前半におけるこの傾向は、例えば奴隷制を告発したHarriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin; or, Life among the Lowly* (1852) にも見られ、その第26章では、ルイジアナ州の農園主St. Clareの長女Evaの死に至る場面が詳細に描かれる。また禁酒小説の代表作T. S. Arthur, *Ten Nights in a Bar Room* (1854) の第三夜と第四夜の中心も、酒で身を持ち崩すJoe Morganの娘Maryの死の床の場面である。

死には至らないものの、子供の病気はMark Twain, *The Adventures of Tom Sawyer* (1876) でも描かれている。南北戦争以前のアメリカ中西部を舞台とするこの小説では、子供たちが冒険の後に決まって病気に襲われ、この

当時の典型的病名が頻出することが指摘され、また実際、マーク・トウェインが育ったミズーリ州ハンニバルでは、1847年幼児の25%が1歳に満たないうちに死亡し、21歳まで生きられる子供は50%という記録がある（齊藤 1, 16）。このように多くの文学作品に描かれる死と病気の描写から推測できることは、同時代の読者にとって死と病気が日常的に訪れるものだったということであり、小説中に突然現れる死の床の場面や病気に陥る場面は、現代の読者と比較して19世紀の読者にとっては決して突飛な展開ではなかつたろうということである。

死や病が日常化している中、19世紀前半に権威を持っていた医療について人々からの不信が募り、結果その権威は下降する。そして権威を持っていた医療は、後に述べる代替医療に取って代わられるか、もしくは権威ある医者も治療に代替医療を取り入れるという変化が現れる。当時権威を持っていた医療とは「逆症療法（allopathy）」と呼ばれる瀉血や水銀投与などしばしば苦痛を伴うもので、この療法は病気の「病んだ興奮状態」から発生する圧迫を開放することにより病気を治癒するとの考えに基づいていた（Green 3-4）。しかし日常化する死や病の伝染を前に、瀉血や劇薬を体内に入れるといった苦痛を伴う逆症療法は懷疑と不安の目で見られるようになり、権威ある医者への信頼は1820年代から失墜し始める。時はジャクソニアン・デモクラシーと呼ばれる民主主義が盛んに喧伝された時代、民衆から敵対心を抱かれるエリート階級には医者も含まれ、医者たちは患者から血と金を吸い上げる輩と見なされる。その結果、1845年までに三つの州を除いて医師の免許制度は廃止される（Green 12, Warner 232）。

1820年代以降に起こったアメリカ人の短命化そして権威を持つ医学への信用失墜の中で、国民の健康を取り戻すべく、医者以外の人も複数の代替医療の考え方を提示した。これら代替医療、一般に「健康改革運動」（health reform movement）と呼ばれる運動で実践された医療には、患者に軽微な症状を人工的に発生させることにより病気を治癒する同毒療法（homeopathy）、植物の病気に対する効用を主張する薬草療法、食事改革により病気を予防・治癒する菜食療法などがあり、これらの非正規の医療従

事者はいずれも権威を持っていた逆症療法に対しては苦痛と危険を伴うとして批判的で、穏和な治療を主張し、病気の治癒だけでなく生活改善による病気の予防も主張したのだった（Green 5-10）。

### III 女性の健康—水治療と徒手体操

1820年代に始まるアメリカ人の健康への不安から健康改革運動への流れの中で、乳幼児や肉体労働に従事する男性の不健康と並んで指摘されたのが女性の健康問題であり、特に問題とされたのは、運動不足になりがちな座った状態が続く生活習慣だった。肉体労働を伴う家事も批判の対象となったが、批判の対象は階級を超えて、中・上流階級女性のピアノ演奏、針仕事、読書、絵を描くことも運動不足の原因として指摘された（Green 21）。

健康維持のための一般大衆向けアドヴァイス・ブック、言い換えれば健康のハウ・トゥ本が盛んに出版され人気を博し、その中では家族の健康を維持する上での女性の役割が規定された。1830年代以降最も人気のあったアドヴァイス・ブック作家の一人 William Alcott の著作には、*The Young Wife*, *The Young Housekeeper*, *The Young Mother* といったタイトルが並び、*The Young Mother* は1855年までに20版が重ねられた（Green 21-22）。健康改革の中で特に女性に目を向けた時、顕著となるのが女性の病と健康改善の意識、そして家族の健康を守る上での女性の役割である。健康改革の中で女性の健康改善を特に強調し、なおかつそれぞれの方法で健康改革の思想を広めようとしたユニークな女性運動家に Mary Gove Nichols と Catharine Beecher がいる。

メアリー・ゴヴ・ニコルズは「水治療（hydropathy / watercure）」を中心に女性の健康改革を推し進めた。水治療とは身体の様々な部分に様々な形で水あるいは温水を当て、その最中やその後に布で体を摩擦する治療法で、こうした処置を医師の判断により1日に2回あるいは3回と定期的に繰り返す。水治療は1820年代シレジアの医師 Vincent Priessnitz により体系

が確立され、アメリカには1840年代健康改革の推進者であるJoel ShewやRussell Trallによって導入された。先に述べた権威を持つ逆症療法に代わるものとして1840年代以降、水治療による診療所は増加し、水治療普及のための雑誌*The Water-Cure Journal*も着実に購読者数を伸ばした(Cayleff 24-25)。

代替医療としての水治療は、逆症療法との比較で二つの特徴を持つ。一つ目は、逆症療法がもっぱら病気の対処療法として治療を行ったのに対して、水治療は病気の治療だけではなく、生活改善による病気の予防、特に女性の病気の予防に力点が置かれたことである。その結果、女性の病気を予防するための方策として系統的生活改善が提示され、菜食主義、禁酒、そして特に女性に対しては衣服改革、体育教育が推奨され、また当時は話題にすることもタブー視されていた避妊についての知識も流布された(Cayleff 65-66)。二つ目の特徴は、逆症療法では19世紀前半の男女のステレオタイプに基づき医師が男性に限られていたのに対して、水治療では女性が医療行為に参加することを積極的に推し進めたことである。医療行為への女性の参加は、男性と比べて知的にも肉体的にも劣っているとされた女性に対する見方を否定して、女性の社会的役割を再定義し、女性に公的領域への参加の道を開くという意味を持つものだった(Cayleff 18)。

こうした水治療の特徴を体現してその普及に寄与したのがメアリー・ゴーズ・ニコルズである。メアリー・ゴーズは一度目の結婚で中絶と死産を経験し、自分の健康が損なわれていく中で医学に対して強い関心を持つようになり、水治療を知った。患者として水治療を受けると同時にその治療法を身に付け、彼女は1840年代半ばにニューヨークに移り水治療を実践するようになる。また特に女性の身体についての講演やアドバイスをを行い、*The Water-Cure Journal*にたびたび寄稿して、作家Edgar Allan Poeに文章を称賛された。1847年ジャーナリストで後に医学博士号を取り水治療を実践することになるThomas Low Nicholsと結婚、妊娠・出産と同時に医療の仕事をこなし、彼女は医学を志す女性たちのロール・モデルとなる。そして水治療の教育機関が必要であるとの認識から、ニコルズ夫妻は1851

年 The American Hydropathic Institute をニューヨークに設立する。しかしまもなく二人の関心は水治療による医療改革から、結婚制度を否定するフリー・ラヴへと移り、他の水治療の医師たちとは袂を分かつことになった (Donegan 27-34)。

ニコルズ夫妻がフリー・ラヴという急進的社会改革思想に向かった理由は女性の健康にあった。1840年代からメアリーは、各地を回る講演の中で、マスターベーションの害や性病といった話題も臆せず取り上げ、また性についての偏見を排除するため性欲を最悪視するべきものではないことを説き、その関連で避妊法について話し、また結婚制度を否定するフリー・ラヴ思想へも傾倒していったのだった (Cayleff 53-59)。彼女たちの関心は病気の治療だけにとどまらず、病気の予防として例えば夫トマスは女性の衣服改革を訴えた。

Dress may be a cause of disease, and an aggravation of other causes. Too much clothing weakens the skin, and keeps back the insensible perspiration. The compression of the female waist, by which the action of the diaphragm is destroyed, all the muscles of the respiration weakened, and the lungs, heart, liver, stomach, spleen, and pancreas compressed into one-half the space designed for them, is too evident a source of disease to require a word of comment. (Nichols 182)

ニコルズ夫妻の衣服改革についてこの文章からわかることは、伝統的な女性の服装によりウエストを締め付ける弊害を指摘することで、女性の健康に力点が置かれていることである。水治療と衣服改革の組み合わせは、女性の解放を二つの意味で目指したと言える。第一に女性が医療行為に従事することにより女性の知的能力が社会で認められること、第二に健康の名の下に衣服改革を推進することにより伝統的価値観から女性を解放することである。そして女性の健康という視点から衣服改革は、次に紹介するキャサリン・ビーチャーも共有する思想だった。

キャサリン・ビーチャーは有名な長老派牧師 Lyman Beecher の長女で、11歳年下の妹に『アंकル・トムの小屋』の著者ハリエット・ビーチャー・ストウがいる。キャサリン・ビーチャーは学校を自ら設立することにより19世紀半ばの女子教育を推進した教育家だった。ビーチャーが推進した女子教育の中でユニークだったのが、「徒手体操 (calisthenics)」と呼ばれる体操の導入で、この点から彼女はアメリカにおける女子体育教育の先駆者とも言われる (“Catharine Esther Beecher”)。

キャサリン・ビーチャーは女性の健康の観点から徒手体操を奨励したが、元々アメリカにおける体育教育は1820年代からハーヴァード大学などで導入された。しかし1850年代まであまり定着せず、1848年以降ドイツ人の大量移民と共にドイツ式の体操あるいは体育 (gymnastics) がアメリカで普及した。ビーチャーが導入した徒手体操とは別種のこのドイツ式体操ジムナスティクスの普及も、19世紀半ばの健康不安が少なからず影響していたと思われる。1850年代に入ってから体育教育普及に合わせるかのようにキャサリン・ビーチャーは徒手体操を女性に奨励したが、こちらはドイツ式ではなく比較的穏やかなスウェーデン式の体操である (Green 89-99)。ビーチャーの著書 *Physiology and Calisthenics for Schools and Families* (1856) では77のポーズが示され、各ポーズに体の動かし方が記されている (図1)。そのイラストに女性をモデルにしていることから女性を主な対象にしていることがわかり、また上級者向けにはダンベルを持って各ポーズをとるという方法もあった。

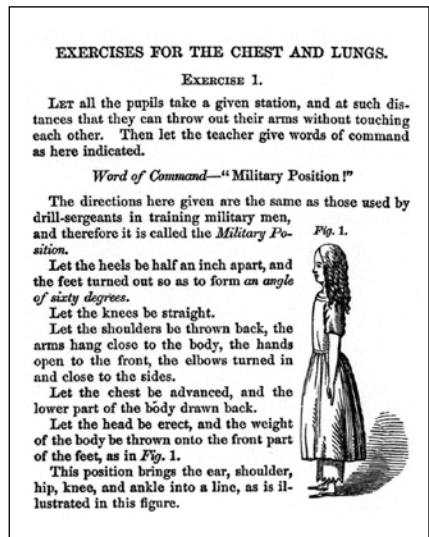


図1 カリステニクスのポーズと説明  
Beecher 10  
Courtesy of The Strong, Rochester, New York

体育教育の普及に努めたのと並行して、先に紹介したメアリー・ゴーズ・ニコルズ同様、ビーチャーはコルセットの着用が女性の健康を損なうという考えを持っていた。『学校と家庭のための生理学と徒手体操』に収録された図版の中には、女性の伝統的服装の弊害を指摘するため、骨格の自然な形成と比較して、コルセットの着用による骨格の変形が女性の健康にとって有害であることを示したものがある（図2）。つまりジェンダーに基づく服装の19世紀的規範をビーチャーは批判しているのであり、そう批判することにより彼女は女性の健康改善を訴えたのだった。先に引用したトマス・ロウ・ニコルズの衣服改革に関する文章はビーチャーの骨格の図版の解説と考えるほど、ニコルズ夫妻とキャサリン・ビーチャーの主張は共通していることがわかる。

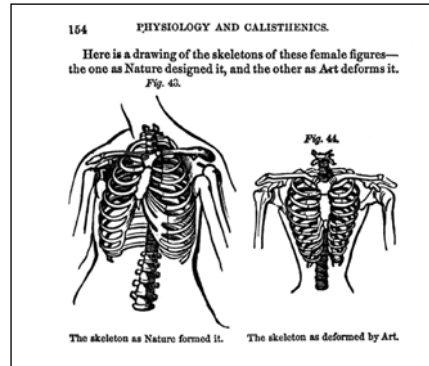


図2 骨格の変形  
Beecher 154

Courtesy of The Strong, Rochester, New York

#### IV 退化の不安とミレニアリズム

ニコルズ夫妻とキャサリン・ビーチャーは、水治療と体操という健康改革の異なる分野の普及に努めながら主に女性の健康改革を目指し、女性の健康増進の一手段として同様の衣服改革を主張した。しかし忘れてならないのは、ニコルズ夫妻が急進的社会改革思想の持ち主だった一方で、ビーチャーは衣服改革により女性の健康増進を目指したものの、ジェンダー化された男女の社会的役割についてはきわめて保守的であった点である。メアリー・ゴーズ・ニコルズはジェンダーによる軛から女性を解放するために結婚制度廃止を含むフリー・ラヴ思想という急進主義を持つに至ったのに対し、ビーチャーが女子教育に取り入れた、後に「家政学」(home



economics) と呼ばれる学問分野は、ジェンダーに基づく社会的役割分担を前提としていた。例えば家政学の分野でビーチャーが著した *A Treatise on Domestic Economy* や *The Domestic Receipt Book* は、家庭を効率よく切り盛りしていくために必要な金銭感覚を養成する内容が含まれ、女性の仕事として料理や掃除といった家事の技術だけでなく、家族の健康を維持する術を身に付けることも目指していた (“Catharine Esther Beecher”)。そのため、理想的な母親あるいは妻のステレオタイプに基づき、女性に家庭を切り盛りする技術を体得させることがビーチャーの家政学の目的だったと言える。したがって同時代の女性参政権運動にもビーチャーは参加することはなく、むしろ女性が投票権を持つことには反対の立場をとった。興味深いのは、女性の地位あるいは家族を巡る考え方においてメアリー・ゴーズ・ニコルズとキャサリン・ビーチャーは両極に位置しながら、女性の健康については同様の主張を行ったということである。

基盤となる思想の相違にもかかわらず、二人を女性の健康という共通の目的に向かわせた背景には、19世紀前半のアメリカ人が感じていた退化の不安があったと推察できる。医者に対する信用が失墜し始めたのと同じ1820年代には、「建国の父」と呼ばれるトマス・ジェファソンやジョン・アダムズが死亡している。独立世代が終わり第二世代に共和制という政治上の実験が託された時、短命化という事実を前にしてアメリカ第二世代を「退化の不安」が襲い、それが国家の将来に暗い影を落とすようになる (Green 13-16)。国民の不健康が個人の問題として受け止められただけでなく、国家の衰え、最悪の場合、国家の滅亡という不安を喚起していたとすれば、アメリカ人個々の不健康は、本論の冒頭 OED で確認した “catastrophe” の定義である「不幸な終局」、「物事の秩序あるいは体系を転覆させるような出来事」の不吉な兆しだったと考えられる。こうした危機感を1850年代に入ってもなお共有していたからこそ、ニコルズ夫妻は先に引用したような健康改革思想に基づき水治療の普及に努めた。

キャサリン・ビーチャーも同時代人の不健康な状態を具体的に指摘する際、退化の不安を表明する。

It is the universally-acknowledged fact, that the present generation of men and women are inferior in health and in powers of endurance to their immediate ancestors. (Beecher 124)

ビーチャーが「広く認識されている」と考えているような19世紀半ば頃のアメリカ人が「健康や抵抗力において、すぐ前の祖先より劣っているという事実」は、文学作品においても表明されている。同時代人のNathaniel Hawthorneは*The Scarlet Letter* (1850) の第2章に以下の語りを挿入した。

Morally, as well as materially, there was a coarser fibre in those wives and maidens of old English birth and breeding, than in their fair descendants, separated from them by a series of six or seven generations; for, throughout that chain of ancestry, every successive mother has transmitted to her child a fainter bloom, a more delicate and briefer beauty, and a slighter physical frame, if not a character of less force and solidity, than her own. (Hawthorne 50)

ここではアメリカ人が移民第一世代から代を経るにしたがい脆弱になり、その退化は女性に現れているという認識が示される。この認識はビーチャーの抱いた退化の不安と女性の不健康に対する認識と通底するものであり、同じく女性の不健康を問題としたニコルズ夫妻ともつながる。トマス・ロウ・ニコルズ、キャサリン・ビーチャー、そしてナサニエル・ホーソンの三者による引用した文献がいずれも1850年代に出版されていることから、この時代、退化の不安は健康改革運動を推進する人々による書物だけでなく、小説もが媒体となって反復されていたと推測できる。さらにこの引用冒頭で退化の不安は「物理的に (materially)」とはすなわち「肉体的に」という意味で、そして同時に「道徳的に (morally)」にも退化は進行しているという認識が読み取れる。

この道徳的側面に着目すると、健康改革運動が起こったもう一つ別の背

景としては、宗教的要因が考えられる。確かに19世紀前半のアメリカは国民の健康以外にも、深まる南北対立や1837年の経済危機など国家衰退を予兆させる要素が複数あった。しかしその宗教的背景を考えると、健康改革運動は単に国家衰退の危機感からだけではなく、同時に未来に向けた希望から発していたとも考えられる。Harvey Greenは、国家衰退という危機感から未来への明るい展望へと向かわせた要因に、新約聖書「ヨハネの黙示録」第20章の記述を根拠とした「千年王国思想」(millennialism)の流行を指摘し、その明るい展望へ向かわせる諸改革の一つが健康改革だという見方をとる (Green 10)。千年王国思想には「前千年王国論」(premillennialism)と「後千年王国論」(postmillennialism)という考え方があり、前者は「キリストの再臨が千年王国に先立つと信じ」、後者は「再臨が千年王国のあとに続く」との信仰である。「前千年王国論者が神の激変をもたらす働きによる千年王国の樹立を信じやすいのにたいし、後千年王国論者はキリスト教徒という人間を媒介として神の王国が漸進的に到来すると考えがち」(田中 10) だったことから、後千年王国が19世紀アメリカ社会の変化に対応して多数派となっていく (田中 275-76)。つまり、完全な社会に徐々に到達することに、人間は自分たちの努力によって貢献できるという考えが、19世紀前半の多くのアメリカ人を複数の社会改革運動へ導いたと考えられる。後千年王国を信じる人々にとって、社会をできる限り理想の状態に近づける努力をすること、つまり社会に存在する問題を解決すべく努力することは、千年王国の到来と、それに続くと考えられるキリストの再臨を待つ者としての義務だった。その解決すべき問題の一つが、アメリカ人が退化しているという問題、彼らの健康問題であり、人々が健康になることはすなわち、至福の千年間 (ミレニアム) の到来を待つ者の義務であるということになる。

ピューリタンの理想を具現すべく建設した植民地がアメリカ合衆国の起源であるなら、アメリカ人が自らの国家をミレニアムが到来する場とイメージしても不思議ではない。その時、国家衰退つまりはカタストロフィの予兆となる不健康という現象は、個人の問題から国家の問題となり、「個

人の健康＝国家の健康」という考え方が成立する。さらに退化を暗示する現象は逆説的に千年王国到来を予感させる宗教的に楽観的なヴィジョンを提供することになる。ニコルズ夫妻やキャサリン・ビーチャーにとって、その希望的ヴィジョンを実現する最大の要素が女性の健康だった。明白には国家や千年王国思想を意識していなかったとしても、彼・彼女たちは少なくとも結果として「健康な女性が健全な国家を形成する」というナショナルリスティックな思想を提示し、その思想が流行した背景には19世紀前半に流行した千年王国思想が影響していたと考えられる。そうだとするなら健康改革運動とは、個人の健康を問題としながら、国家を射程に入れた社会改革運動であると同時に、キリスト教徒としての義務を意識して多分に倫理性を持った宗教的運動だったとも言えるのである。

#### Works Cited

- Arthur, T. S. *Ten Nights in a Bar Room*. 1854. Whitefish, MT: Kessinger Publishing, 2004. Print.
- Beecher, Catharine. *Physiology and Calisthenics for Schools and Families*. 1856. New York: Harper, 1873. Print.
- Caplow, Theodore, Louis Hicks, and Ben J. Wattenberg. *The First Measured Century: An Illustrated Guide to Trends in America, 1900-2000*. Washington D.C.: The AEI Press, 2001. Print.
- Cayleff, Susan E. *Wash and Be Healed: The Water-Cure Movement and Women's Health*. Philadelphia: Temple UP, 1987. Print.
- Donegan, Jane B. "Hydropathic Highway to Health" : *Women and Water-Cure in Antebellum America*. New York: Greenwood, 1986. Print.
- Douglas, Ann. *The Feminization of American Culture*. 1977. London: Papermac, 1996. Print.
- Green, Harvey. *Fit for America: Health, Fitness, Sports and American Society*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1986. Print.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter. 1850. The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Vol. 1. Ed. William Charvat et al. Columbus: Ohio State UP, 1962. Print.
- McGarry, Molly. *Ghosts of Futures Past: Spiritualism and the Cultural Policies of*

- Nineteenth-Century America*. Berkeley: U of California P, 2008. Print.
- Nichols, T. L. *Esoteric Anthropology (The Mysteries of Man): A Comprehensive and Confidential Treatise on the Structure, Functions, Passional Attractions, and Perversions, True and False Physical and Social Conditions, and the Most Intimate Relations of Men and Women*. 1853. New York: Arno, 1977. Print.
- Stowe, Harriet Beecher. *Uncle Tom's Cabin; or, Life among the Lowly*. 1852. New York: Norton, 1994. Print.
- Twain, Mark. *The Adventures of Tom Sawyer*. 1876. London: Penguin, 1994. Print.
- Warner, John Harley. *Against the Spirit of System: The French Impulse in Nineteenth-Century American Medicine*. 1998. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2003. Print.
- “Catharine Esther Beecher.” Biography. *National Women's History Museum*. National Women's History Museum. n.d. Web. 3 October, 2012.
- 齊藤弘平「元氣と病気—*The Adventures of Tom Sawyer*における少年像の文化形成」、『アメリカ文学研究』第48号、日本アメリカ文学会、2012。
- 田中秀夫編『イギリス革命と千年王国』東京：同文館、1990。

本稿は平成24年度実践英文学会シンポジウム「カタストロフィとその後—*Catastrophe and its Aftermath*」(2012年10月26日)での発表原稿に加筆・修正を施したものである。

